

巻頭言 フランス語圏文学から世界へ

かつて、フランス文学は世界への開口部であった。世紀を代表する存在だったヴォルテール、ルソー、ユゴー、サルトル、また19世紀から20世紀にかけて次々と現れたスタンダール、バルザック、フローベール、ゾラ、ジイド、プルーストといった小説家や、ボードレール、ランボー、マラルメ、ヴァレリーなどの詩人たちは、世界中の作家にとつともなく大きな影響を与えた。彼らは、それぞれの特殊性から出発しながらも、不思議にも普遍的な射程を備えていたのであり、それがフランス文学の主要な特質であった。その一方で、セリーヌやジュネなどに先鋭的に見られる、言語の規範性を撥ねのけ、破壊する力も、別な魅力のひとつであった。だが、ある時期から、フランス文学はきわめて内向きで、ミニマリストになってしまったように思われてならない。

それにとって代わるように、世界への接続口となったのは、第二次世界大戦以降に、フランス本国の外でフランス語によって表現を始めた、いわゆるフランス語圏文学の作家たちだ。彼らが、内向きではあり得ないのは、むしろ彼らの出自による。植民地的状況を抜きにして語るができない作家たちの内部には、本質的に外部が巣くっているからだ。だからこそ、彼らのうちには、特殊性から出発しながらも普遍性を目指す伝統が、逆説的にも、脈々と息づいている。フランス語圏文学と一口に言ったが、それぞれの地域によって異なるのはもちろん、作家たちの志向によっても作品は千差万別であるから、そこにひとつの流派を見いだすのは難しい。カリブ海の作家、マグレブの作家などと分けようとしても、けっして一括りにできない。これは、ある意味で当たり前すぎるほど当たり前のことだ。それでも、彼らがつながっているとすれば、それは彼らのうちなる他者であり、継母であるフランス語とフランス文学という共通の臍の緒によってである。

先だって来日したフランソワーズ・ヴェルジェスがエメ・セゼールにおこなったインタビューのなかで強く印象に残った箇所がある。マルティニックの若者に、「自分を発見するには何を読むべきか」と尋ねられたら何を推奨しますか、という問いにセゼールは答える。「普遍的な文化です。私たちはすべてに関心を持つべきです。たとえば、ギリシア語、ラテン語、シェイクスピア、フランスの古典作家、ロマン派の作家たちなどです。個々の人間がそれぞれの答を見つけるよう個人的に努力すべきです。私たちはだれひとりとして普遍的文明の埒外にいるわけではありません。普遍的文明は存在し、そこにあって、私たちが豊かにもすれば、私たちが駄目にもすることもあります。一人ひとりが探求すべきです」(『ニグロとして生きる: エメ・セゼールとの対話』(立花英裕, 中村隆之訳, 法政大学 出版局)。

セゼールの言葉は、積極的な混淆を説くグリッサンなどと比べると、穏当すぎるように見えるかもしれない。だが、ぼくとしては、このような普遍的な基盤を備えることこそが、フランス語圏文学の研究には不可欠だと思われる。個々の状況を超えたフランス語圏文学の魅力を捉えるためには、一方で、それぞれの特殊性に踏み込むことが必須だが、それだけでは十分ではない。これらの作家たちはみんなフランス文学という巨人の血を吸って、成長したからだ。いや、フランス文学だけでなく、様々な古典をと言うべきだろう。世界文学としてのフランス語表現文学、その水平線は広大すぎて目が眩む気がするが、そこかしこに浮かぶ群島を目指して、多くの若い研究者が漕ぎ出している日本の現状は新たな時代を予感させ、心から言祝ぎたいと思う。

澤田 直 (立教大学)

第1回研究発表会報告

2013年10月26日(土)午前10時より、日本フランス語フランス文学会秋季大会会場、別府大学にて開催された日本フランス語圏文学研究会の第1回研究会合の発表要旨を掲載いたします。

Édouard Glissant エドゥアール・グリッサンの詩集 *La terre inquiète* 『揺らぎの地』(1955)の読解 —— 序詩Théâtreを中心として

早川卓亜（早稲田大学大学院文学研究科）

カリブ海フランス領マルティニク島出身の作家エドゥアール・グリッサン(1928-2011)の二番目の詩集『揺らぎの地』(1955)は、*Le mouvement, loin des rivages*「動き、岸から遠くで」、*La terre inquiète*「揺らぎの地」、*Le retour à la mer*「海への帰還」の三部からなる。部の題からは、海から陸へ、そしてまた海へ、という場所の移動が読みとれる。

最初の詩編Théâtre「舞台」では「*Je vous connais vous êtes rive et au-delà mystère.*」 「私はあなたを知っている あなたは岸 その先は謎。」 「*Je vous connais qui êtes rive et au-delà mystère !*」 「私はあなたを知っている あなたは岸 その先は謎！」のリフレインが目を引く。岸で、その先では謎のvousとは何なのか、この詩編では定かでない。上述の海→陸→海という作品全体の場所の移動、各詩編に海、岸、陸が登場する点、さらに第二部の詩編*Le livre des offrandes*「供物の書」に上記のリフレインが再登場する点から、海と陸の境界の岸であるvousとは何かという問題意識で詩集を読む方針には整合性がある。

詩集に登場するvousのさまざまな様態に着目すると、基本的に海と砂浜で揺らいでいる——riveである——が、山や耕地、平野でもある可能性が示唆されている(こちらがmystèreに対応するかもしれない)。これを踏まえて詩篇Théâtreに戻ると、vousは「la nature」 「自然」だと言えるのではないか。実際、詩集には多様な自然の要素が登場する。ある土地の自然が呼びかけの対象vousとなっており、このvousのさまざまな様態を通して自然を描き出す点に作品の主題があると考えられる。Théâtreの題については、この詩編が序詩として作品全体の時空間を、つまり「舞台」を提示することを示唆しているだろう。

詩集と第二部の題になっている「la terre inquiète」もまた作品の舞台である土地を指しているだろう。水が寄せては返す波打ち際を含んだvous-rive-natureのあり方を踏まえると、inquièteの語は水と陸の境界が絶えず揺れ動くさまを表していると考えられる。

先行研究では、この詩集を「イメージを通じた土地の理解」ととらえたり、空間の知覚という観点から論じたりしている。発表内容はこれらと同じ方向性の議論である。

コメントは次の三点。

- ・呼びかけの主題はグリッサン詩に頻出するが、vousとはつまるところ世界なのではないか。
- ・Théâtreにおける雨の主題について、雨音とともにvousが登場する。また詩編末尾の雨と地との「dialogue」 「対話」は雨音のことではないか。
- ・風景の提示という詩集の主題に関して、グリッサンも*L'intention poétique*『詩的意図』(1969)や*Le Discours antillais*『カリブ海論』(1981)などでしばしば言及するエルンスト・ロベルト・クルティウスの『ヨーロッパ文学とラテン中世』(1948)の重要性。

アフリカの残像とアメリカスの共感 マリーズ・コンデ 『最後の預言王たち』をめぐって

大辻 都

この発表では、マリーズ・コンデの『最後の預言王たち』(Maryse Condé, *Les derniers rois mages*, Mercure de France, 1992)を取り上げ、一連の作品群のなかでふたたび前景化されるアフリカ像に焦点を当てる。

コンデは1976年、アフリカにアイデンティティをもとめるカリブ女性を描いた自伝的作品『ヘレマコノン』で小説家デビューした。80年代半ばに発表されたアフリカ・バンバラ族の王国セグーを舞台とした歴史物語『セグー』がベストセラーになるが、その後は一転して故郷のカリブ海やその人々を中心とした小説作品を精力的に発表する。『最後の預言王たち』はそうした時期のなかばに書かれた重要な作品のひとつでありながら、作者の「アフリカ」テーマの回帰が見られるのが特徴である。

『最後の預言王たち』は、グアドループ生まれの男性スペロを主人公とし、舞台となるのはカリブ海、そしてアメリカ合衆国の都市チャールストンである。このふたつの場所が関係づけられながら、同時にここには、実在した西アフリカ・ダホメイ王国最後の王、ベハンジン(あるいはベアンザン、1845-1906)の存在が絡んでくる。その背景には、1894年、このアフリカ王がフランス軍に降伏した後、カリブ海のマルチニック島に送られ、12年もの歳月を過ごしたという史実がふまえられている。

『最後の預言王たち』に直接ベハンジンが登場することはないが、小説では、王と、マルチニック滞在中に王が出会った島の女性との間に子供が生まれており、その子孫がスペロだという設定である。

王が島を去った後、子供の母親とは音信不通となるが、父親不在のこの家族にとって、アフリカ王の子孫であることはこのうえない誇りとなり、王の息子であるジェレは幼少時の記憶しかない父についてノートに書き綴る。このノートが、ジェレの息子、さらにその息子へと引き継がれてゆく。こうした史実とフィクションを交えた物語の展開とともに、手記の一部としてアフリカ神話を連想させる豹(じっさい、ベハンジンのトーテムだった)と人間の娘との異類婚が語られるなど、小説中にはアフリカ的な要素がしばしば現れる。

また、タイトルのrois magesにも重要な含意があると考えられる。rois magesは福音書に登場し、ふつう「東方の三博士」と訳されるが、預言者、呪術師でもある。そのうち、「黒人」として表象されるバルタザールBalthazarにはベハンジンBehanzinの音が響き、存在としても両者は重ね合わされているように読み取れる。



グアドループ島(撮影・大辻都)

民族詩論争再考——セゼール、ドウペストル、グリッサン

廣田郷士（東京大学大学院）

仏共産党の公認詩人ルイ・アラゴンは、彼の『国民詩日誌』(Journal d'une poésie nationale, 1954)の中で、仏語詩はその伝統的形式と韻律を重んじるべきという理論を展開する。ハイチの詩人ルネ・ドウペストルがこれに賛同を表明したことに対し、マルチニックのエメ・セゼールが強い異議を唱えたことから、『プレザンス・アフリケーヌ』誌上で生じた論争、それが「民族詩論争」(un débat autour de la poésie nationale)である。本発表では、同議論を通じて仏語黒人作家によって問われた詩と民族との関係性を、三人のアンティューユ作家らの立場を中心に探った。

セゼールは同議論で、既存の詩的形式を「革命」に逆行する要素であると批判する。セゼールにとっての詩とは、あらゆるア・プリオリを排して成り立つものであるからだ。しかしそれは、セゼールが詩と民族が結びつきえないものと捉えていたわけではなく、詩にとっての「本質的な徴」と「民族的な徴」を同一なものとして把握するセゼールにとっては、むしろ民族とは詩によって到来するもの、詩・革命・民族を導き出すこと、これらは全て同じ一つの営為となるのである。

他方ドウペストルの議論は、民族の存在そのものに重点を置く。まずドウペストルは、黒人作家らの標榜するネグリチュードの議論が、各民族が置かれた個別具体的状況を見逃したものであり、むしろそれは作家にとって「神話」であり「畏」であると批判する。そしてドウペストルはまた、ハイチという新世界に、植民地支配によってもたらされた、アフリカ、フランスなど複数の文化的水脈を見出す。カリブ世界の混淆様態を指摘するドウペストルの議論の射程は、90年代のクレオール性の理論の萌芽とも言える。

そして両者の議論を出発点としつつ、同時期に独自の黒人文学論を発表したのがエドゥアール・グリッサンである。グリッサンはそこで、「民族詩」において賭けられているのが共同体への問いだとしつつ、セゼールの『帰郷ノート』を例にとり、仏語黒人文学の特徴を、「カオス」という言葉で説明する。それは、世界を把握する象徴体系が手探りの状態であり、また文学の共同性を担保する規範・尺度・韻律といった様々な意味でのmesureが欠けた状態、démésureであるという。意識のカオスの状態から、未だないアンティューユの共同体の独自のmesureが導き出されなくてはならないというグリッサン、彼にとっての「民族詩」とは、アンティューユの未来に向けた問いとして成立する。

共産党による政治と文学をめぐる理論が、黒人作家らの側から批判的に問い返されたこの議論。それは形式と伝統に対し黒人詩人らがいかに距離を取るかといった問いにとどまらず、一人の「黒人詩人」が拠って立つための、詩と民族をめぐる理論が、現在、過去、未来それぞれの視点から問い直され、黒人作家の内部からその自立的理論が初めて構築された議論でもあったといえる。

グリッサン『サルトリウス』あるいは出会いの詩学

工藤 晋

1999年にエドゥアール・グリッサンがガリマール社より発表した7作目の小説*Sartorius — le roman des Batoutos*は、従来のマルティニク・サガから離れ、アフリカ人ディアスポラを題材とした点で作家の新しい創作の局面をしめしている。副題のバトウトとは西暦500年頃にアフリカ中央部に興り、世界に拡散して「見えなくなった」invisible架空の民として設定される。テキストは3つの部分に分かれ、第1部ではバトウト発祥の地オンコロにおける創世神話が、第2部と第3部では近世以降の世界史の時空に拡散した民の痕跡がいくつものエピソードの束となって提示される。小説と銘打たれているが特定の主人公をめぐる一貫したストーリー展開はみられない。叙述のスタイルも均一ではなく、長談義la palabreすなわちアフリカの人々の集いの会話、散文詩、ルポルタージュ、思索的エッセーといったさまざまな文体が入り混じる。

本発表ではこうした『サルトリウス』の全体を俯瞰しながら、ふたつの主題に注目した。ひとつは、「エレネ！」Eléné!という謎めいた合言葉に凝縮された、時の壁を越える出会いの希求である。世界に拡散したアフリカの民と西洋を主体とする歴史的時空のさまざまな他者との出会い。その出会いこそ本作の詩的意図の核心部であると思われる。表題の「サルトリウス」とはバトウトが出会う他者の象徴といえるだろう。作家自身の解説によれば、サルトリウスとはゲーテ協会のディレクターを務めるグリッサンの友人である。グリッサンはその個人的な家系の情報を神話的ディスクールのなかに組み込み、歴史と神話とを交錯させる。Sartor、Sartorius、Sartorisと綴りの異同をとめないながら小説中に断片的に出現する白人家系との出会いを通じて、バトウトの姿は浮上する。サルトリウスという固有名は「黒いオルフェ」の作者をも想起させるだろう。サルトルは黒人に対して「相手に見られずに見る」という特権を享受し続けた白人の眼差しを告発した。グリッサンは黒人と白人との相互認識の契機についての物語を書くことで、サルトルの問題提起に応答したのではないだろうか。

二つ目の主題はアフリカ人の移動の地理学である。奴隷貿易による強制移住、植民地における虐殺、内戦といった歴史的事実がつねに参照される一方で、オコ、オドノ、イモコというオンコロから旅立つ3人の登場人物にあらわれる移動パターンの差異が読者の注意をひく。オコは自らのアイデンティティの痕跡「クワメ」(サイン)を残しながら旅する。オドノは即興の語りの名手として育ち、クワメを残さず世界のなかに消えてゆく。イモコは定住と血縁にこだわる集団主義者である。

こうした移動の神話的タイポロジーとさまざまな出会いの語りの束はグリッサンが唱える〈全一世界〉という詩的ビジョンに具体的で動的なアスペクトを与えるものだと言えるだろう。大いなる軌跡/痕跡traceの物語『サルトリウス』が提起する問いは巨大である。西洋文明のなかでアフリカの民が認識される契機。個別の民族に帰されない民の可能性。グローバル化社会のなかで移動のプロセスを捨象した時空の接合への批判。本発表をステップとして、ひとつの「サルトリウス論」を仕上げるつもりである。

会員紹介

日本フランス語圏文学研究会のメンバーを随時紹介していきます。新たなメンバーの入会を募集中ですので、関心ある方はご連絡ください。

鶴戸 聡 UDO Satoshi

専門：アラブ＝ベルベル文学・演劇
所属：鹿児島大学法文学部人文学科准教授
連絡先：udosatoshi@nifty.com

アルジェリアやレバノンなどフランス語圏アラブ世界を中心に多言語による文化活動を追ってきました。基本的にはフランス語やアラビア語で書かれた小説を研究していますが、最近は口語アラビア語やベルベル語による歌謡や演劇、ブラジルのレバノン移民文学などにも関心があります。勤務先の国際島嶼教育研究センターの兼務教員でもあり、奄美からニューカレドニア、タヒチにまで島伝いにフィールドを広げることが野望です。

この一年は韓国との交流がぐっと増え、比較植民地文学研究によりやく着手といった観がありますが、実は台湾語文学運動とベルベル語文学運動の比較研究が目下の（先の見えない）課題。とはいえ拡散する研究テーマに引きずり回されているのが現状です。それでも世界中を飛び回って思うのは、文学研究におけるフィールドワークの重要性。いかにして作品が書かれ、刷られ、手渡され、読まれ、語られるのか、日本やフランスとは懸け離れたアフリカの状況のなかで、現地の人々と一緒に文学の営みに参入していくのは研究の醍醐味でもあります。

日本マグリブ文学研究会もやってます。ご関心のお有りの方はご連絡を。

大原宣久 OHARA Norihisa

専門： 20世紀フランス文学、とくにミシェル・レリスとその周辺
所属・経歴： 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻博士課程修了
現在、同専攻助教
連絡先： reusement@hotmail.com

20世紀フランス（本国）の作家、ミシェル・レリス（1901 - 1990）の研究をしてきた大原です。ほかの時代・ほかの作家にときどき浮気しながらも、また日々の雑用的な仕事や育児に追われながらも、表看板としては細々とレリス研究を続けております。

パリのブルジョワの家庭に生まれながら、フランスの外部に惹かれ、民族誌家としてアフリカやアンティルに赴いたレリス。そうした外部にレリスは何を求め、何を見（見られず）、何を得た（得られなかった）のか、そして彼はどう変わっていった（変わらなかった）のか、これまで考えてきました（いまも考えています）。

フランス語圏クレオール作家たちとレリスとの実際の交流や、彼らにレリスがどのように受け入れられていたのかという点など、私自身まだよくわからない・知らないことも多いので、この研究会のみなさまからぜひ教えを賜りたいです。どうぞよろしくお願いします。



チュニジア、コロッセウム(撮影・立花英裕)

尾崎 文太 OZAKI Bunta

専門：カリブ海のフランス語圏文学（特にエメ・セゼール）、フランスの植民地・海外県問題
 所属・経歴：立教大学他非常勤講師、一橋大学言語社会研究科博士後期課程修了
 連絡先：b_ozaky@ybb.ne.jp

現在は、立教大学などで非常勤講師として勤めており、フランス語、フランス語圏の文学・社会・歴史などの授業を担当しています。研究の専門はマルチニックの作家・政治家であるエメ・セゼールですが、幅広く、フランス語圏文学、植民地・ポスト植民地問題に関心があります。博士論文では、セゼールの戯曲と政治活動の関係性を分析し、現在もその延長上で、セゼールの思想の現代世界における可能性について考えています。また、カリブ海地域の作家・思想家が提起する問題を、より広い「島嶼の問題系」として捉え、たとえば琉球弧の問題、あるいは島尾敏雄の言う「ヤポネシア」の問題に関連づけられないかなどということも考えています。まだまだ「フランス語圏文学」というジャンルを総体的に見渡せるだけの知識や経験を持っていないので、今後こちらの研究会でいろいろと勉強させていただければと思っています。

廣松 勲 HIROMATSU Isao

専門：フランス語圏カリブ海域文学、ハイチ系ケベック移民文学
 所属：(独)日本学術振興会特別研究員PD／慶應義塾大学総合政策学部訪問研究員
 連絡先：isao5352@hotmail.com

私が学部に入學した90年代、「フランス語圏文学」という分野は、日本ではまだそれほど知られていなかったといえます。当時の日本では、フランス語で書かれた文学作品といえば、ほぼすべからく「フランス文学」に同化される傾向が強い時代でした。その一つの転機は、90年代末、特にマルチニック島発信の「クレオール文学」が翻訳・紹介され始めたことだったといえます。

私がフランス語圏文学に関心を持ち始めたのは、丁度この時期に当たります。まずは、マルチニック島やグアドループ島発信の所謂「クレオール文学」の小説作品を中心にして、研究を始めました。とりわけ、パトリック・シャモワゾー（1953-）とラファエル・コンフィアン（1951-）の小説における文体や語りの構造を分析しながら、いかなる問題系がどのような手法に則って文学テキストに書き込まれるのかを検討してきました。

その後、カリブ海域文化の拡がりも考慮し、ハイチ共和国で制作されるハイチ文学や（カナダはケベック州の）ハイチ系移民文学にも研究対象を拡大しました。ハイチ共和国では、フランス海外県とは大きく異なる社会・歴史・政治的文脈の下に作品制作が行われ、またクレオール語が文学言語として根付いている地域の一つでもあります。現在の所、私の研究対象は、ハイチ系移民文学の中でもエミール・オリヴィエ（1940-2002）とダニー・ラフェリエール（1953-）の小説作品です。ただ、今後の計画としては、ハイチやマルチニック島のクレオール語で執筆された作品群も視野に入れていきたいと思っています。



モンREAL、ジャック・カルチエ広場
 (撮影・廣松勲)

日本フランス語圏文学研究会会報
第2号 2014年1月28日刊

日本フランス語圏文学研究会

早稲田大学法学学術院立花研究室
(早稲田キャンパス8号館712号室)
〒169-8050
東京都新宿区戸塚町1-104

HP:
[http://litterature-
francophone-2012.blogspot.jp/](http://litterature-francophone-2012.blogspot.jp/)
Mail:
miyakoo385@hotmail.com

新刊紹介

中村隆之『カリブ-世界論』(人文書院)

90年代に「クレオール」ということばが日本に受容され、また議論を巻き起こしたのは記憶にあたらしい。それは、カリブ海やケベックなどのフランス語圏に若い読者の目を向けさせる大きなきっかけともなった。「ブーム」はひと段落したが、研究の着実な歩みは絶えることなく、ここに豊かな実を結んだ。バラク・オバマが大統領に就任した2009年にグアドループで勃発したゼネストから説き起こす本書は、ヨーロッパ近代史を通してアンティル諸島、アルジェリア、ブラック・アフリカ、インドシナといった地域におけるフランスの植民地主義と脱植民地運動の軌跡を丁寧にたどり、コロナル状況において生み出される文学的抵抗の系譜をあきらかにする。綿密な文献調査にもとづく情報提示と分析は、日本語によるカリブ海やフランス語圏文学研究を新しい水準に導いたといえるだろう。「政治の同化、文化の異化」を論じた第二章はフランス海外県の問題点を理解する基本的視座を与えてくれる。

第二次大戦後のマルティニクやグアドループにおける労働運動の詳細な報告も本書の著しい成果のひとつだろう。当局に対する民衆の怒りと抵抗を大きく取り上げることによって、教科書的な歴史事件は人々の生活レベルへと接続する。それによって2009年のゼネストの歴史的射程があきらかになり、セゼールやファノンを読み直すことの意味が理解されるだろう。さらに、カリブ海という「小さな場所」における「成功した植民地支配」の考察は現代の消費社会一般への批判にもなりえていることに気づかされる。本書はひとつの状況論でありつつ、グローバリゼーションに席捲される現在の「世界論」に対するもうひとつのアプローチを提起している。

(工藤 晋)



マルティニク島、シェルシェル
図書館 (撮影・立花英裕)

★編集後記

都知事選の行方が気がかりな今日このごろ、みなさまいかがお過ごしでしょうか。日本フランス語圏文学研究会機関誌「Archipels Francophones」第2号をお届けします。巻頭言をいただいた澤田先生に心より感謝いたします。アクチュアルな文学状況の追求と古典とを往還する大切さをあらためて痛感しました。本号の特集として、昨年10月26日の第1回研究会合の発表内容を報告いたします。思い出せば、会場からの貴重なコメントを数多くいただき、活発に意見が交わされ、充実したひとときでありました。参加者のみなさま、ありがとうございました。

次回第3号は昨年のセゼール生誕100年をふりかえってセゼール特集を組み、4月ごろに発行を予定しています。今後はカリブ海に限らずさまざまな地域に目を向けてゆくつもりです。みなさまのご寄稿をお待ちしています。また第2回の研究会合は3月上旬に開催の予定です。詳しくは追ってご連絡いたします。

(工藤 晋)